

ジャンルを超えた共通性（6） —デフォー作品における政治・歴史・文学—

干 井 洋 一

本稿を含む一連の論考では、政治小冊子と長編小説という異なるジャンルを対象に、デフォーが設定した語り手の独自性、アイロニーの技法、歴史的事例の用い方という3つの特徴に着目しつつ、デフォー作品がもつ共通点について考察していく。前稿に引き続き『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』(*Reasons against the Succession of the House of Hanover, 1713*)を取り上げる(ハノーファーではなく英語名ハノーヴァーを用いる)¹⁾。本稿では、先行研究を検討した後、作者デフォーが本作品の後半部において、語り手の役割を劇的に変化させていることについて論じる。

I

上述した問題を考察していくに当たり、まずは『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』(以下では『王位継承に反対する理由』と略する)の構成を以下に示す。

- (a) 冒頭部分
- (b) ハノーヴァー家の王位継承に反対であると述べる箇所
- (c) ジェーン・グレイに関する史実を導入する箇所
- (d) 絶対王政への忠誠を取り上げた箇所
- (e) 王位継承に反対する理由としてフランスの脅威を挙げる箇所
[本稿では以下を後半部とする]
- (f) 英国を病人に喩える箇所
- (g) ロバート・スペンサーに関する史実を導入する箇所

- (h) リチャード2世に関する史実を導入する箇所
- (i) 僭王ジェームズに王位継承資格がないと断言する箇所
- (j) 結論部分

次に、作者デフォーが『王位継承に反対する理由』において、読者に伝えようとした内容を確認しておきたい。王位継承問題に関するデフォーの持論は以下の3つにまとめることができる。

1. 英国民は1701年の王位継承法を遵守すべきであり、アン女王の跡は、新教徒であるハノーヴァー選帝侯ジョージが継ぐべきである（カトリックを奉ずる僭王ジェームズの王位継承に反対）。
2. 名誉革命こそ英国の礎を成すものであり、議会によって承認されたウィリアム3世の治世こそ、英国が断固として守り抜き、継承していくべきものである（血統だけを重視したスチュアート王家による王位継承は否定すべきであり、またルイ14世が体現する絶対王政は否定すべき）。
3. カトリック国フランスの力は殺ぐべきであり、その意味でもルイ14世の庇護下にある僭主ジェームズが次期国王となることは許されるべきではない（議会を尊重するという英国における現行の政治体制を維持すべき）。

II

前稿では本作品に対し詳しい分析を行ったサザランドとリケッティの議論を紹介した後、二人が言及していない語り手の特異性について論じた。本稿においては、作者デフォーが作品の後半部で語り手の役割を劇的に変化させていること、そして、その変化は肯定的に捉えるべきであることについて論じていく。前稿で述べたように、本作品『王位継承に反対する理由』に対する先行研究はアイロニーの有無という一点に絞られているのが現状である。そして、このようなアイロニー問題への偏重が起きているのは、ウェイ・C・ブース（Wayne C. Booth）の先行研究が大いに関係していると言えるだろう。

ダニエル・デフォーは様々なジャンルで数多くの作品を著しており、多面的

な才能を備えた「非常に多作な作家」であった²⁾。政治小冊子の分野では『非国教徒捷徑』（*The Shortest Way with Dissenters*, 1702）が最もよく知られており、この作品は同時代の作家ジョナサン・スウィフトの政治小冊子『控えめな提案』（*A Modest Proposal*, 1729）と比較されてきた。両作品の比較検討を初めて本格的に行ったブースは、アイロニーが首尾一貫しているか否かという点を中心に絞って二作品を比較した。ブースは『控えめな提案』はアイロニカルな政治諷刺であることがはっきりしているのに対し、『非国教徒捷徑』の方はそうではないと述べている。彼は「デフォーは現実にいそうな語り手を創り出しているので、当時の読者は何の疑いも感じずに『非国教徒捷徑』を読み進んだであろう」と評し、読者がアイロニーに気づかない可能性が高いと指摘している。このように、明確なアイロニーの有無という観点から、ブースはスウィフトの作品に軍配を上げている。

一方、アイロニーが明確か否かという観点だけでなく、作品の一貫性という観点からも、ブースは両作品を比較し、「リアリスティックな一貫性という観点だけに着目すると、デフォーの手法の方が優れたものだといえる」と『非国教徒捷徑』を高く評価しているのは非常に興味深い³⁾。ブースが以上のように、アイロニーの有無という観点を中心に二作品の比較検討を行ったのは、当時の有力な批評方法であった新批評の影響が大きかったと言えるだろう。新批評を用いたアプローチはデフォーの小説にも援用されており、『ロビンソン・クルーソー』や『モル・フランダース』のアイロニーを論じた研究がその代表格と言える⁴⁾。

ブースによる両作品の比較は興味深いだが、彼の主張の前半部、つまり『非国教徒捷徑』はアイロニカルな作品ではないという主張は妥当とは言えないであろう。というのも、デフォーの『非国教徒捷徑』はそもそもアイロニーを意図した作品ではないからである。デフォーがこの作品で用いた手法はアイロニーではなく、サザランドが名付けた‘make-believe’の手法、つまり別人になりきるといふ手法であった。デフォーは『非国教徒捷徑』では、ある虚構の人物

を語り手とし、その人物になりきって語るという手法を用いているのである。

サザランドが論じているように、デフォーはこの手法‘make-believe’を極めて巧みに用いている⁵⁾。たとえば、初期のパンフレットである『貧しき者の嘆願』(*The Poor Man's Plea*, 1698)において、デフォーは貧しい下層階級の男というペルソナを被り、上流階級や判事たち自身がまず率先して生活態度を正すことの必要性を訴えている。また『疫病日誌』(*The Journal of the Plague Year*, 1722)においても、デフォーはHFという虚構の語り手になりきって、あたかも実録であるかのごとく、ロンドンを襲ったペストの様子を詳細に描いている。しかも、デフォーは、語り手HFをデフォーの属する側である非国教徒にせず、わざわざ反対派である国教徒に設定するという、非常に凝った方法を用いている。

さらに極端な‘make-believe’の例として、『非国教徒捷徑』を挙げることができる。この政治小冊子において、デフォーは反対派の人物に扮し、口調もそっくり真似て、自らが与する側である非国教徒を非難弾劾するという、極めてアクロバティックな諷刺手法をとった。反対派である国教会強硬派の論法や口調が完璧に真似られていたため、この小冊子が世に出た時、著者が非国教徒のデフォーだとは誰も気づかず、出版当初この政治パンフレットは国教会強硬派の大喝采を浴びた。もっともその後、デフォーによる諷刺であることがわかり、畏にはめられた国教会強硬派は激怒し、その結果デフォーはニューゲートに投獄され、晒台にかけられることになった。このように、虚構の語り手を創り出し、その人物になりきって語るという手法をデフォーは生涯を通じて用いている。

III

ある作品に対する解釈が複数存在する場合に、その作品の執筆目的が明らかになるならば、それは非常に重要な参考資料となるであろう。しかし、近現代の作品であっても執筆目的が明らかになることは稀である。その意味では、18

世紀初頭に出版された『非国教徒捷徑』について、作者の執筆目的を知ることができるのは非常に珍しいと言えるだろう。もちろん作品に対する作者の解説を文字通り受け取ることができないケースもあり、作者がどのような状況で、またどのような目論見をもって、自身の作品を論評しているのかを見極める必要があるだろう（また単に作者の意図＝作品の意味ではないことにも留意する必要がある）。

『非国教徒捷徑』においては、『控えめな提案』とは異なり、語っている内容だけから、作者の真意が読み取れるようにはなっていない。『非国教徒捷徑』の語り手は反対派を縛り首に処すべきだと読者を煽り、過激な主張を繰り返すものの、その主張は、対比する作品としてブースが取り上げた、スウィフトの『控えめな提案』におけるカニバリズムを推奨する主張のように、完全に異常な主張とは言えないからである（スウィフトの作品については前稿で論じている）。それどころか、『非国教徒捷徑』における語り口は、狂信的な国教会強硬派の語り口を巧妙に真似たものに過ぎず、本作品が出版された当初は国教会強硬派から喝采を浴びたほどであった。

また前稿で述べたように、『控えめな提案』においては、作者の真意に当たる箇所がイタリック体で強調されているが、『非国教徒捷徑』においては、これに該当するような仕掛けは盛り込まれていない。つまり、作者の意図を事前に把握しているというような特別な事情がない限り、『非国教徒捷徑』を手にした読者が、作者デフォーの主張と、語り手が展開している主張とが全く異なっていることに気づくことはないのである。

つまり、ブースが自らの議論の前提としているように、もしデフォーがスウィフトの『控えめな提案』と同様の作品、つまり最後にはアイロニーであることが明確になる作品を書こうとしていたのであれば、ブースが言うように、デフォーは『非国教徒捷徑』において当初の目的を果たすことに失敗したことになる。

しかしながら、ブースの前提そのものが妥当ではなかったと判断すべきだろ

う。デフォーが『非国教徒捷徑』で意図していることを、ブースが取り違えていると考えるべきなのだ。というのも、ノヴァクが指摘しているように、デフォーは『非国教徒捷徑』の13年後に書いた小冊子『名誉と正義への訴え』(*An Appeal to Honour and Justice*, 1715)の中で、『非国教徒捷徑』で用いた手法は「なりきる手法」(‘make-believe’)であると説明しているからである。以下に該当箇所を引用する。

筆者本人(=デフォー)が、彼の真似た人物であるサシェヴレル(=国教会強硬派の代表的人物)の説教や書物を実際に引用すべきだったと言って、筆者を非難する人たちがいる。もし筆者がそうしていたならば、筆者は彼らの言いたいこと(非国教徒を弾圧すべきだとの国教会強硬派の主張)をそのまま繰り返しただけであるという弁明を裏付けることになり、筆者の反論が正当なものだと証明できたのにと彼らは言う。しかし彼らは的外れなことを言っているのだ。もし筆者がそうしていたら、全ての党派に致命傷を負わせた、この小冊子をもつ刃を無くしてしまうことになり、彼らに対し掠り傷すら負わせることができなかつたであろう。この小冊子の狙いはトーリー一派になりすまして、彼らの主張を彼ら自身の言葉で語ることにより、まずは彼らにその主張を公に認めさせ、その後で、その同じ主張を反対派によって仕組まれた中傷であると否定させ、彼らを困惑させることであつたのである。(下線部筆者)⁶⁾

下線部から明らかなように、デフォーはそもそも『非国教徒捷徑』でアイロニーを用いるつもりがなかつたのである。逆に、国教徒が本作品を書いていると読者に思い込ませ、最終的には「彼らを困惑させる」ことが、デフォーの本来の目的だつたのだ。その目的を達するため、まずは、『非国教徒捷徑』が国教会強硬派の人物によって書かれたものであるかのように見せ掛け、次に強硬派の連中が大賛辞を送つた後で、実は作者が非国教徒であると種明かしをした

のであった。

そうすることで、国教徒の主張が狂信的に過ぎることや、敵対している非国教徒に対して、非人間的で過酷な措置を取ろうとしていることが公に暴かれることになる。つまり、デフォーは意図的に『非国教徒捷徑』をアイロニカルな諷刺作品にしなかったのである。そして、本冊子をめぐる大騒動はデフォーの当初の目論見通りに推移したと言えるだろう（ただ自身の投獄にまでつながってしまうとはデフォーは想定していなかったであろう）。確かに、ブースが述べているように、『非国教徒捷徑』においてはアイロニーであることが明確となるような仕掛けは組み込まれていない。しかし、それはデフォーがアイロニーを用いるつもりがなかったからなのであり、ブースの言うようにデフォーがアイロニーを駆使できなかったからではない。

IV

『非国教徒捷徑』とは異なり、11年後に執筆された『王位継承に反対する理由』の方は、先行研究が明らかにしているように、アイロニカルな作品であることに疑いはない。ただ、ブースの比較研究の影響は、『王位継承に反対する理由』にも及んでおり、本作品においても、『非国教徒捷徑』と同じくアイロニーの首尾一貫性が論議的となってきた。この観点から、本作品の分析を本格的に行った最初のデフォー研究者がサザランドであった。

サザランドは本作品においてはアイロニーが不発に終わるケースがあるという立場をとっており、本作品の中程に位置する（f）の箇所（英国を病人に喩える箇所）で初めて、どのような読者に対してもアイロニーが明確になると述べた。しかしながら、以前の論考で検討したように、多くの読者は（c）の箇所（ジェーン・グレイの史実を導入した箇所）で『王位継承に反対する理由』がアイロニカルな作品であることに気づくと考えられる⁷⁾。

以下の引用は、本作品の（f）の箇所に対するサザランドの論評であるが、後述するように、彼の評価は少々妥当性を欠くと言わざるを得ないであろう。

This argument is reinforced with some robust imagery of taking a Tory vomit to “spew out ... your Tory filth, your idolatrous filth, your tyrannic [sic] filth.” Here at last the irony is obvious enough, and from this point to the end of the pamphlet the case against the Pretender is not in doubt.⁸⁾ (emphasis added)

「この議論」というのは、『王位継承に反対する理由』で語り手が展開した次のような論法を指している。具体的には「病気によっては体に合わないものを服用することでしか治せないものがあり、僭王を英国に迎えることは、英国の現在の病を治すための唯一の方策である」という論法のことである⁹⁾。まず語り手は英国を病人に喩える前に、一般論として難病に対する特殊な対処法について述べている。病気によっては「体に合わないものを服用することで病気を治す」というケースがあり、時には「毒を用いる治療」を行うこともあると語る。それでも難しい場合、つまり「回復の見込みが僅かな難病の場合は命がけの治療法を行うしかない」と続け、英国はこのような絶望的な病状にあると語り手は述べる¹⁰⁾。

病人が壊疽を患っているケースでは、思い切った切開や、場合によっては壊死した部位の切断が必要であり、英国の絶望的な病状を鑑みると、フランスという「嘔吐剤」(Vomit)の摂取といった果断な措置をとるしかないのが今の状況だというのが語り手の見立てである。そして、医者が難病治療のために嘔吐剤を処方したら、気持ちが悪くなるのは当然であり、英国も同様の状態にならざるを得ないと語る。英国の重い病を治すには、僭王ジェームズが王位に就くとともに、彼が英国に持ち込むカトリックの教義という嘔吐剤が必要なのだという説明が続く。

英国に巢喰う「トーリー主義がもたらす穢れ」(Tory filth)、「偶像崇拜の穢れ」(idolatrous filth)¹¹⁾、「専制の穢れ」(tyrannic filth)を吐き出させるためには、カトリックの僭主を迎えるしかないのだと語り手は皮肉を込めて読者に

断言している¹²⁾。

もし本作品の読者がジェームズ支持派であれば、嘔吐剤として僭主ジェームズを受け入れるべきという語り手の提案に反発するとともに、ジェームズを嘔吐剤にまで貶めた語り手に対し激しい怒りを感じるだろう。一方、読者が選帝侯ジョージ支持派であれば、一時的に僭主ジェームズを英国王として招き入れるという策は単なる質の悪い冗談に過ぎず、語り手やその背後にいる作者の本心ではないことを読み落とすことはないだろう。サザランドが述べているように、本作品の（f）の箇所アイロニーに気づかない読者はいないのは確かである。

V

英国を病人に喩える箇所（（f）の箇所）以降は、『王位継承に反対する理由』のアイロニーは明確なものとなると述べた後、サザランドは作品の後半部（g）以降の部分を全く論ずることなく、本作品に対する評価を次のように下す。

But the total effect of the pamphlet is one of blur and muddle. Defoe shifts ground too often; he is not consistently ironical, and he offers arguments, meant to be ironical, which could too often be taken at their face value, and which, if the reader is meant to reject them as ridiculous, ought to have been shown quite unambiguously to be so.... But it would have been better for Defoe if he had spoken more openly for Protestantism, and not chosen the method of irony and indirection which he handled so uncertainly.¹³⁾
(emphasis added)

サザランドの本作品に対する評価は次の2点に要約することができる。

- ・本作品は一貫してアイロニカルな作品とは言えない。語り手のアイロニカルな主張が通じず、読者が文字通りに受け取る箇所が存在している。結果

として、本作品は統一感に欠けるものとなっている。

・語り手の主張は本心ではなくアイロニーに過ぎないのだと読者にはっきりと分からせるためには、デフォーは作中で皮肉をもっと効かせるとともに、読者が全く受け入れることができないような愚劣極まる主張を語り手に展開させるべきであった。もし、デフォーがプロテスタント教義への支持をもっと明確にし、十分に駆使できなかったアイロニーや遠回しな表現を使っていなければ、本作品の真意はより正確に読者に伝わったであろう。しかしながら、このサザランドの酷評は一方的であり、妥当性を欠いたものであると言わざるを得ない。さらには、作品後半部についての検討を一切行うことなく、上述の結論を導いていることも大いに問題である。

以下では、次の3つの論点を取り上げつつ、サザランドの本作品への評価が妥当でないことを示したい（次節では以下の3つのうち1番目を取り上げ、残りの2つは次稿で扱う）。第1に、『非国教徒捷徑』のケースと同じように、『王位継承に反対する理由』に対しても、作品の執筆目的を踏まえる必要がある。第2に、本作品の結論に近い部分（残り4分の1の部分）においては、アイロニーの手法がそもそも用いられていないことに着目すべきである。第3に、本作品がアイロニーを用いる手法から、作者の持論を率直に語る手法へと変化しているのに合わせて、作品前半における史実の使い方（レディ・グレイ事件）と、後半部分での史実の使い方（リチャード2世の廃位）とでは、語り手が用いる論調が全く異なっていることに対しても注意を払うべきである。

VI

まず『王位継承に反対する理由』の執筆目的について見ていこう。本作品が出版された2年後に、デフォーは『名誉と正義への訴え』を著し、『王位継承に反対する理由』の執筆目的について以下のように述べている。

Nothing can be more plain than that the titles of these books [=Reasons

Against the Succession of the House of Hanover and other two political pamphlets] were Amusements, in order to put the books into the hands of those people who the Jacobites had deluded, and to bring the books to be read by them.... It is certain, the Jacobites cursed those tracts and the author; and when they came to read them, being deluded by the titles according to the design, they threw them by with the greatest indignation imaginable....¹⁴⁾

本作品の題名をジャコバイト派の人物（僭主ジェームズ支持派）が書いたものであるかのように見せ掛けたのは読者を担ぐためであったと、デフォーは自らの目論見を明らかにしている。「ジャコバイトに騙されている読者」（デフォーから見ると愚かにも僭主ジェームズを支持している一派のこと）に、本作品を含む計3作品を手にとらせ、それらを実際に読ませるために、「ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由」という、自らの真意とは正反対のアイロニカルな題名を付けたと、デフォーは『名譽と正義への訴え』の中でその意図を明確にしているのである。

このように、本作品の執筆目的は僭主ジェームズを攻撃し、プロテスタントによる王位継承を支持することだったのであるから、作者デフォーが作品の残り4分の1において、語り手に自らの持論を率直に語らせるという方向に方針を転換したのは、作者の真意を明確に伝えるという観点からすると効果的なものであったと言えるだろう。

今後の議論の道筋を明確化するため、次稿以降の議論を先取りしつつ、作品全体を俯瞰的に眺めてみよう。第1に、本作品の結論部に近い（i）の箇所では、語り手は率直な語り口で、僭王ジェームズに王位継承権がないと断言している。そのため、この箇所より前の部分とは異なり、王位継承法をしっかりと守り、英国民が一丸となって選帝侯ジョージを支持することが最も大切であるという作者の真意がストレートに読者に伝わるようになっている。デフォーは

冒頭から用いていたアイロニックな語り手を変化させ、作品の終わりの方では、自らの持論を語り手に率直に語らせているのだ。第2に、同じく結論部に近い(h)の箇所、つまりリチャード2世の史実を導入した箇所においてもアイロニーは全く用いられておらず、語り手は皮肉を効かせることなく、真正面からジェームズ2世の廃位という問題を丁寧に論じているのである。

VII

本稿の最後では、主としてアイロニーの観点から取り上げられてきた2作品である『非国教徒捷徑』と『王位継承に反対する理由』を比較しながら、それぞれの特徴について纏めておきたい。

デフォーがニューゲート獄に繋がれることになった1度目の筆禍事件の原因となった『非国教徒捷徑』は、ワットを始め、多くの研究者たちが論じてきた¹⁵⁾。一方、『王位継承に反対する理由』は、デフォーに2度目の投獄を引き起こす原因となった3作品のうちの一つなので、デフォーの伝記において必ず言及はされているものの、本格的な研究が行われているとは言い難い。そして、どの研究においても、本作品におけるアイロニーの有無という問題に議論の焦点が当たっている。

以下では、アイロニーの一貫性以外の問題も踏まえつつ、『非教徒捷徑』と『王位継承に反対する理由』の2つを比較し、2作品の共通点と相違点についてまとめてみよう(それぞれの作品を『捷徑』および『理由』と略す)。

1番目に、2作品の共通点を挙げてみよう。2つの政治小冊子がそれぞれ原因となって、作者デフォーが筆禍事件に巻き込まれ投獄の憂き目を見たことが、まずは共通している(前者はニューゲート獄、後者は王座裁判所の牢獄という違いはある)。より詳しく見ていくと、『捷徑』のケースではデフォーに担がれた国教会強硬派が激怒し、ノッティンガム伯がデフォーを投獄に追いやっている。

一方、『理由』のケースでは、作品がアイロニカルであることが明白だった

にもかかわらず、ホイッグ派の作家が積年の恨みを晴らすべく、デフォーを名誉毀損で告訴するに至った。それに対しデフォーはすぐに保釈金を用意し、解決への道筋をつけたのであるが、怒りを抑えられなかったデフォーは無謀にも、この訴訟を担当していた裁判長を『レビュー』誌で批判してしまい、その結果、当該裁判長への名誉毀損の罪で投獄されている¹⁶⁾。

次に、執筆目的に関しても2つの作品には共通点がある。どちらの政治小冊子も素直に読むことはできず、2作品の語り手は共に読者を欺き担ごうとしている。『捷徑』の場合はアン女王のもとで、「便宜信奉」(Occasional Conformity)を廃し、公職から非国教徒を締め出そうとする法案に対抗して、国教会強硬派の真似をしたデフォー（彼は非国教徒側である）が、読者に作者を誤認させ、作品の強硬な主張に国教徒側の読者が拍手喝采を送った後に、実は反対派による揶揄であったことを明らかにするという意地の悪い戦法をとっている。

一方、『理由』の場合は、まずは題名に「ハノーヴァー家の王位継承に反対する」という文言を入れることで、作者が選帝侯ジョージ反対派である（＝僭主ジェームズに与する側である）と思わせた後に、実際に作品を読み進めると作品の途中で、僭主ジェームズを真っ向から否定していることが明らかになるというアイロニカルな作品構造になっている。

2番目に、2作品の相違点を挙げてみよう。第1に、2作品の執筆目的が異なっているため、最初は作者の真意を伏せている読者に対し、自らの本心を読者に明らかにするタイミングが全く違ったものになっている。『捷徑』においては、作者が自分たちの側にいる人物（例えば国教会強硬派のサシェヴレルのような国教会聖職者）であろうと思わせて、大いに喝采を浴びた後で、実は反対派からの揶揄であったと暴露するというのが目的なので、意地悪な仕掛けを明らかにするのは、作品を出版し評判になった後ということになる。一方、『理由』のケースは全く異なる。この作品については、作者の真意とは逆になった題名をわざとつけ、まずは反対派に作品を買わせ、その後、作品をある程度読

み進んだ後で、読者自身が担がれたことに気づくという仕掛けが施されている。作中で、僭主ジェームズの支持派の愚かさをあげつらうことが作者デフォーの目的なので、真意をはっきりさせるタイミングは作品の途中ということになる。

第2の相違点は、それぞれの作品の目的に叶うように、作中で用いられている手法が互いに異なることである。『捷徑』の場合は作品が読み終えられ、作品への評判が高まるまで、真相に気づかれてはならない。そのため、作品で採用されている手法は「なりきる手法」(‘make-believe’)となっている。一方、『理由』の場合は、まずは反対派に作品を買わせ、作品をある程度読み進んだ後で、読者自身が担がれたことに気づくという仕掛けを組み込んでいるため、最初はアイロニーの手法を用い、次に、作品が終わりに近づくときとアイロニーを用いるのを止め、作者デフォーが自らの持論を語り手に率直に語らせるという方向に舵を切っている。

それではどうしてデフォーは2番目の作品である『理由』を徹底してアイロニカルなものにしなかったのだろうか。第V節で述べたように、サザランドはデフォーがアイロニーをうまく扱えなかったことを、その理由としているが、それは的外れの評価である。デフォーは最初の4分の3では語り手にアイロニーを操らせ(アイロニック・ペルソナの採用)、残り4分の1では語り手を変化させ、自らの持論を率直に語らせるという大きな方針変換を行っている。以下では、このような手法を用いた理由を検討してみよう。

英国が王位継承問題で揺れているとき、デフォーにとって、プロテスタントの選帝侯ジョージを支持する小冊子を書くための選択肢は複数あった。最もわかりやすく読者に伝える方法は、作者デフォーが自らの持論を率直に語ることであったろう。一方、アイロニーを用い、選帝侯ジョージに反対するかのよう論調を装い、一貫してアイロニカルな作品を書くことも可能だったのであろう。そして、もしデフォーがそのような作品を書いたとしたら、以下のような内容となっていたはずである。『ハノーヴァー家の王位継承に反対する理由』

という現行の題名のもと、僭王ジェームズを過度に褒め称え、フランスのルイ14世に英国が屈することの利点を賛美し、議会の解散、シティの廃止、カトリックの布教がどれほど素晴らしいかを繰り返すような、一貫してアイロニカルな作品をデフォーは書くこともできたであろう。

しかし、デフォーはこのタイプの作品を書くことを選ばなかった。その理由は以下のようなものであったと考えられる。11年前に『非国教徒捷徑』を出版したために筆禍事件に巻き込まれたデフォーは、王位継承という非常に危険なテーマで政治小冊子を書く場合には、十分な安全策を取る必要があると考えたであろう。例えば、ホーズレーは「当時アイロニーは危険な手法であり、作者の意図が明白なアイロニーでも訴追の対象となることはしばしば起きている」と説明している¹⁷⁾。

デフォー自身もその危険性を十分承知していたと思われる。『名誉と正義への訴え』でデフォーは、『王位継承に反対する理由』で用いた読者を担ぐという自らの手法について言及し、「題名につられて作品を読んだ読者は激怒して、本作品を文字通り投げ出したであろう」と楽しげに書いている。そして、『理由』のようなタイプの作品を出版することの危険性にも触れ、「もし僭主ジェームズが王位に就いていたなら、自分は死罪となったであろう」と述べている¹⁸⁾。幸いなことに、『名誉と正義への訴え』が出版された年には、プロテスタントの選帝侯ジョージが既に王位に就いており、デフォーが死罪になることはなかった。しかしながら、本作品を含む3作品において作者が僭主ジェームズを批判し、選帝侯ジョージを支持しているのが明らかであったにもかかわらず、デフォーは2度目の筆禍事件に巻き込まれ投獄の憂き目を見ているのであり、18世紀初頭においてアイロニカルな政治小冊子を出版することの危険性は極めて大きなものであった。

『王位継承に反対する理由』の最後4分の1では、デフォーは語り手に自らの主張を十二分に語らせている。語り手は僭王ジェームズには王位継承権がないのだと率直に断言するとともに、英国民がなすべきことを以下のように明確に

示している。王位継承問題に揺れる今こそ、プロテスタントによる継承が明言された現行の王位継承法を英国国民はしっかりと守り、一丸となって選帝侯ジョージを支持し、カトリック国フランスに対抗していくべきだと語り手は述べ、読者に歩むべき道を指し示しているのである。

注

- 1) Daniel Defoe, *Constitutional Theory in The Works of Daniel Defoe*, ed. W. R. Owens and P. N. Furbank (Pickering & Chatto, 2000).
- 2) 拙著『ダニエル・デフォー研究』（関西大学出版部、2019）第1章を参照。
- 3) Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction* (The University of Chicago Press, 1961), 318-20.
- 4) 『ダニエル・デフォー研究』第5章を参照。
- 5) James Sutherland, *Daniel Defoe: A Critical Study* (Harvard University Press, 1971), 130-1.
- 6) Maximilian E. Novak, "Defoe's Shortest Way with the Dissenters; Hoax, Parody, Paradox, Fiction, Irony, and Satire," *Modern Language Quarterly* 27 (1966), 406-7. 上述の論考で引用された *The Present State of the Parties* の一部を筆者が要約したもの。
- 7) 拙稿「ジャンルを超えた共通性（4）—デフォー作品における政治・歴史・文学—」『関西大学文学論集』（関西大学文学会、2022）第71巻第4号。
- 8) James Sutherland, *Daniel Defoe: A Critical Study* (Oxford University Press, 1971), 64-5.
- 9) *Constitutional Theory*, 174.
- 10) *Ibid.*, 174-5.
- 11) 偶像崇拜とはカトリックの礼拝を指す。
- 12) *Ibid.*, 175-6.
- 13) *Daniel Defoe: A Critical Study*, 64-5.
- 14) *An Appeal to Honour and Justice in Shakespeare Head Edition of the Novels and Selected Writings of Daniel Defoe* (Blackwell, 1927), vol. 14, 212-3.
- 15) Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction* (The University of Chicago Press, 1961), 318-20; John F. Ross, *Swift and Defoe; A Study in Relationship* (Norwood Editions, 1974), 81-5; Everett Zimmerman, *Defoe and the Novel* (Los Angeles and Berkeley, 1975), 14-7; Paul K. Alkon, "Defoe's Argument in *The Shortest Way the Dissenters*," *Modern Philology*, 73 (1976), 512-23; Michael M. Boardman, "Defoe's Political Rhetoric and the Problem of Irony," *Tulane Studies in English*, 22 (1977), 87-102.
- 16) James Sutherland, *Defoe* (Methuen, 1937), 織田稔、藤原浩一訳『ロビンソン・クルー

ジャンルを超えた共通性（6）
—デフォー作品における政治・歴史・文学—（干井）

ソーを書いた男の物語：ダニエル・デフォー伝』(ユニオンプレス, 2008) 第4章, 第9章を参照.

- 17) L. S. Horsley, "Contemporary Reactions to *Defoe's Shortest Way with the Dissenters*," *Studies in English Literature*, 16 (1976), 407.
- 18) *An Appeal to Honour and Justice*, 213.